



大野 英子選

「あすなる集」特選

全てお任せ

渡 辺 幸 子* 福 島

介護付ホームに入所してしばし怠けもの掃除洗濯全てお任せ
 体操は少し手を抜き顔真面目周囲見まわしリズム覚える
 余暇時間お茶に体操趣味制作思ったよりも活動多し
 洪水を機に入所せし近隣の知人もありて話が弾む
 咳き込める相席の人の背を撫でてその温もりの我に伝わる

別れの式典

山 口 清 子 群 馬

戦争のニュースみながらおでん食む胸をちくちく刺す痛みもて
 かぎりなく温かい小説読みをれば金平糖があるくなつた
 うっかりと余計なことを言ひし昼 夜はみかんのどにつかへる
 十月の朝はきりりと男前冷たい空気に目を覚まされて
 風立ちて庭木々の葉がざわめきぬ別れの式典はじまるごとく

ひつそりと待つ

印 出 美由紀 神奈川

晩夏おそなつの大きくすのきをとほりくる風の秀先に猫がねてゐる
 混沌ちゆうんの地をめぐりて帰り来るねこのせなかの模様の銀河
 トウシユーズは天へ翔ぶため白足袋は地霊に出会ふために履くらむ
 舞ひ終へて橋掛かりゆく重衡の余焰のやうな赤曼殊沙華
 横たへば耳は天から降るものをひつそりと待つ漏斗のかたち

渋谷ヒカリエ

末 光 奈緒子* 神奈川

どこからか布団を叩く音がするそんなに遠慮しなくていいのに
 裏庭の秋のヒロインうす紅の秋海棠は片恋のよう
 雲間から噴水へ注ぐゆるやかな陽ざしと風が水面に遊ぶ
 イントロの数小節であの頃の〈学生街の喫茶店〉の中
 斑入り葉のすすきの花穂が気取つてる渋谷ヒカリエ植栽として

電話ボックス

前 田 亜津子* 神奈川

何もない日々なにもないに倦みたる若き日と何もないことに感謝する今
 若き日に読みし書物もまっさらな心地でもいちど読める幸せ
 研ぎたての包丁で料理した夜の指先にふたつ絆創膏を貼る
 はたちの夏実らぬ恋の幕切れは晴海埠頭の電話ボックス
 街角に金木犀の香漂いてふと甦る「デスベラード」が

端のめくれた敷物

荒 川 ゆみ子 東 京

東京の人となりたるわたくしと夫が建てた小さなおうち
 狭小の三階建て知らぬ間に鍛えられゆく大腿四頭筋

ひとつづつ息子の部屋が空いてゆき端のめくれた敷物残る
この家の段差寒暖差耐えられぬ日が来ることを晩夏に思ふ
ホーリーも一緒に行けるペット可の物件見つけ心決めたり

鈴木 竹志選

銀色の靴 前中 映 東京

「ブーチンにこの子を見せる」医師の言ふこの子を日本のテレビは見せず
人を憎むころろばかりが繁茂するわたしの中の乾いた砂地
思ふことなきにあらねど黙禱は早送りして見る甲子園
世界一マスクをつけてゐる国の人が怖れてゐるものは何？
銀色の靴が片方落ちてゐる土曜の朝の枕木の上

三角の耳 牧 好恵 東京

墓参り終へて待つ間のバス停に風を放さぬコスモスの群れ
花添へて線香あげていつ来てもそのみに足りバスに居眠る
無風なる台風前のむし暑さ素麺の束サツとゆであぐ
せはしない台風前の風の向き猫はめぐらす三角の耳
昼餉にと梅干、昆布のおにぎりを作り置きして歯科へ眼科へ

丸 一一年 磯貝恭子*新 湯

気がつけばコートを羽織りたくなって冷蔵庫には夏の残骸
階段を伝ひ二階の奥にまでポポーの甘い香りが届く
秋晴れの空には夏より透明な雲が広がる歩いていこう
何気ない小さなことが幸せであるよ焼き鳥温め直す
手術から丸二年たち三人目の主治医に変わり予約入れたり

空は高いぞ 加藤 かづゑ*新 湯

コンバイン彼方に動き稔り田と空の間に越後赤塚駅
ランドリーもいけど今日は自分家でシートあわいを洗う 空は高いぞ
御近所にあちこち五本さんちもくせい今年のかおり今朝玄関に
幾度もの入院入所の手続きで義父の名前を書き慣れてきぬ
スマホ越し施設の内より義父の顔コチコチで言う「お元氣ですか」

報恩講 栗三 誌 野*富 山

京都駅この前よりは混んでいて列に加わるみどりの窓口
十月は報恩講の月ゆえに家の掃除に家族まとまる
昔より明るい曲の恩徳讃秋の御堂に響き渡りぬ
コスモスを揺らして通る秋風はどうしても甘いのだろう
プレゼントまるで使つてくれないがポロシャツだけは気に入りし父

王者のごとし 菊池 むつ江 長野

響さくるあれはコンバインさつさうたる仕事の後の田は冬のさま
水たまりも倒伏の稲もかまひなしコンバイン今や王者のごとし
刈取り後脱穀まつ間の夜毎にはいろりの端の長談議ありき
櫃の実を割りて食べゐるわが姿日向ぼつこの猿さながらに
かたばみの地を這ふ黄花と蛭蝶この小春日をひたすら惜しみて

松尾 祥子選

学童の部屋 柴田 有里*愛 知

痩せようと決めたその日に手作りのおはぎが届く彼岸中日

台風の前座とばかり小雨降る街を湿らす秋雨前線

まあいよいよつくりしなとゴロゴロとする子見逃す勉強タイム

半袖とジャンパー脱がぬ子が集う秋風通る学童の部屋

「本日は後の月見」と団子屋のチラシで気づく夕暮れまぢか

野分の雨 高橋 みどり*愛知

牧水と子規の忌日には生まれたひと日 野分の雨降りまさる

「スカートが短いよ」つて注意したわたしはガンバル先生だった

退職の前に出会った生徒らの記憶はすべてマスクも込みで

生徒らの行事に保護者を招かない今のかたちが実はうれしい

被告人席で判決待つごとく検査キットを見る十五分

マイナカード 杜河内 久美子 三重

顔写真真うまく撮れたといふ母はマイナカードの中で微笑む

父在らばマイナカードを悲しまむ癌で失くしし左眼のこと

可憐なる春の小花を育みて秋のあけびはふくやかに垂る

かけつこを映す動画に添へられたをさな児を追ふ娘のまなざし

少年のおもざし少しのぞかせて五歳が蹴上ぐ園庭のかぜ

もう痛ないわ 岡田 美子*京都

クリアな板が気配を吸い込んで三年ぶりの静かなランチ

笛太鼓の音の近づく午後三時トラックに載る御輿が過ぎる

転けたのは一瞬のことよみがえるその瞬間はコマ送りになる

友からの「青たんできたん」の文面にああ京都弁やもう痛ないわ

群生のカンナのオレンジ色抜けて夏の疲れの続く十月

天国へのパスポート 高瀬 和子 兵庫

一万のヒツジが並びあるやうな羊雲浮く紺碧の空に

天国へのパスポートだと少年は御朱印帖を机にしまふ

月の沙漠の歌をこころでうたひつつゆつくり歩く鳥取砂丘を

思ひきり「おかあちゃん」と叫びたし亡き母の部屋にひとり立ちゐて

夫のゐない結婚記念日庭すみの畑にキクナが小さき芽を出す

知らんけど 原田 登美 兵庫

熱中症のくすり三粒で見たる夢津軽海峡にとぶアキアカネ

関西のしゃべりの終はりの「知らんけど」御破算にされて珠またはじく

彼岸花さやや揺れるるるなか道キツネの（こん）を追慕する道

衣更へ長袖の赤に白き染み記憶はないが記録ありたり

骸骨の衣装に電車で通学すハロウインのあさ留学生は

水上 美季選

閉ぢこめられる 末吉 瑠璃子 山口

マンシヨンの外装工事が始まりてメッシュシートに閉ぢこめられる

陽が差してメッシュシートが風に揺れゼブラ模様はが美しくありたり

作業する若者に声をかけたれど言葉通じぬ 異国の人らし

呉服屋のまた一つ消え商店街はいよいよ寂しくなつてしまへり

休日是他県ナンパー並びゐて唐戸市場は賑はひ増しぬ

存在感あり 新明 恭子*香川

正月の寿喜焼のため白菜のポット苗買う産直市で

牛糞をたっぷり入れて鋤き込んだ畝に白菜つぎつぎ植える
行きたかったマチュピチュ思い植えてゆくじゃがいも四キロ「インカのめざめ」
わが股関節を支えるネジ釘に存在感ありましろく写る
ネジ釘の入る人工股関節わが一身を支えて五年

真夏 日は 永田 恵美 福岡

考查後か昼に街ゆく制服の子らの声良し「お腹すいたあ」
人と馬の関係はおよそ五千年戦で死んだ馬はどれほど
夕暮れの道をハの字の点描にして自動車の光が流れる
真夏日は中森明菜と強炭酸だれの文句も受けつけないわ
弥生人もこんな夕陽を見たかしらちよつとさみしくなつたのかしら

新 旧 垣野 幸一 *長崎

この春に教諭となりし孫娘益は一日で任地に帰る
土砂降りワイパー急速回転しトンネルに入り心安らぐ
落葉にも新旧のあり雨あとの木蔭歩けば若き葉雑じる



原賀 瓊子選 「その二集」特選

カモミールティー 成田 裕子 *青森

カモミールティーの香りに泣きそうになつてゐる夜 月影淡き
チョコレート色のコスモスちよつとだけ誇らしそうにツンと咲いてる

町離れたる温泉サウナにもテンポの速き楽の音流る
長生きに笑いが大事と教わるもわれの生活に笑いが足りぬ

カンカン 田島 寿恵延 *大分

干天に畑の土はカンカンにかたまり茗荷の芽が出てこない
北海道の野湯をめぐる番組に「行つた行った」と妻とはりあう
何を待つ何を悩むか夜顔は白き花びらなかなか開かぬ
サッカートのドリブルをする六歳は満面の笑みで未来へ走る
「わだつみのいるこの宮」の絵が浮かぶ木登り上手の四歳を見て
よよむ 牧野 初江 鹿児島

棚奥に置きっぱなしの赤ワインラベルも褪せて四十年経つ
春子さん、時子さん逝きつひにまた英子さん逝く次なるはあ
この十年^{とも}往き来絶えたる想ひ出の倉場先生いかに御座すや
よよむ腰伸ばして甘蔗を見渡せば考の声して掠るる葉擦れ
この家もわれも古りたりさりながら庭の柿のみ撓にみのる

秋薔薇の最後の輪切り取つて春にまたねと枝を刈り込む
いっばいのT O D O L I S Tの間を縫つて友と映画を見に行く土曜
思うようにならぬ筆先眺めてはため息をつく書道の稽古

江ノ電 人見 江一 *神奈川

江ノ電は稲村ヶ崎でカーブして海が見えれば華やく車内

コンビニのペットボトルを抜き取ればすかさず出たる次のボトルが
月寒の丘うめつくす鈴蘭は記憶の中で微かに香る

本日の氏名に代わる番号が壁に灯るを外来に待つ

コンビニの無かつた頃を思い出す角のパン屋でだいたい済んだ

視線 福島 健太郎 神奈川

老人のおれであると諾へり路ゆく視線が吾を仕分けす

この街も空白多く過ごせしか未踏の路地を日々埋めむとす

犬を飼ふその手があつた連れ合ひは齢を経たとて犬にはならず

歩きつつふと気がつきぬ人はみな生まれた日からが晩年なのだ

国旗とは布と知るべし風ふかば右へ左へなびくものなり

野川 奥 浩 昭 東京

野水橋、相嘗浦橋、清水橋 野川にかかる橋のかずかず

野川では五つわたれば向う岸あまた石置く京の鴨川

川岸にキクイモの黄の咲き群れてまた咲き終へて秋の風立つ

野川には老いの釣り人けさも見ゆスイスイ走る小魚も見ゆ

むかう岸こちらの岸と往き来せりハグロトンボは彼岸のけふを

とおいわたし 日山 七菜子* 東京

降りつもる埃を掃除するようにタスクよすべてびかびかになれ

わたしからとおいわたしがそこにいて踊つてるのを見ているわたし

テーブルに置かれたゆびの節を見た レバノン料理よりもきになる

色ちがいのおなじ服着ておなじ道おなじ時間に歩いてるひと

結婚は生活であり営みだ 仕事のように肅々とやる

影山 一男選

三度目の秋 阿部 直子 新潟

十月十日は体育の日と決まつた週休二日が夢だつた頃

小鳥かと思まがふ速さで逆光をよぎりゆきたる蝶の残像

目に沁みるつゆ草の青としべの黄にウクライナおもふ三度目の秋

ああやはりゆふべの風は又三郎青いどんぐり石段隠す

友の手の白き包帯はづされて眠たき五限国語の時間

君もユニクロ 佐藤 彩 湖* 新潟

五時のチャイム聞くと寂しくなると言う中二男子の憂鬱の理由

そのブラウス見たことあるとお揃いの君もユニクロ我もユニクロ

ぼろぼろの旗振って立つ人形が表情変えず車線を指示す

分校の野菜どれでも百円でだんだんふくらむわたしのカバン

不覚にも解除忘れた目覚ましが三連休の初日に鳴りぬ

見えない絆 清水 由美子* 長野

ただいまとおかえりなさいで紡がれる見えない絆改札口には

改札のこちら側には「おかえり」がだだ漏れしてるじばばばかり

幼らを歓迎するかいつまでも庭去りゆかぬタテハチヨウあり

見つめても見つめてもまだ見たい振り向きながら秋の三日月

栗ご飯サンマを焼いてスタチをぴゅつ 秋押し寄せたある日の夕餉

爪の形 小田 沙也加* 愛知

電球を変えれば世界が明るくなる 四百円ですぐ明るくなる

津南と北アルプスはぼんやりと違う気がして水を選んだ
手を繋ぐかもしれないなくてこの人の爪の形を覚えたかった
血流の音と冷蔵庫の音は似ていて二人暮らしに浸る
眞贋がわからないまま落ちてゐる羽いちまいで冬を呼び込む

命やあわれ 谷 口 久美子*三重

いたずらに人を誹りし我が胸にあざみの棘のごときがささる
今日ひとひ胸につかえし事のありブラックコーヒーのみに苦し
鏡台の隅にみつけれ桜貝十九の春のときめきに遇う
初夏の光のシャワーあびながらキーウのひまわりのその後を思う
福島の子牛あわれ馬あわれ十年放られし命やあわれ

大松 達知選

白 桃 新 敦 子 鳥 取

出迎へのわれに応へる父の杖カコンカコンとうなづくやうに
里芋の煮付けのほろり柔らかく入れ歯の父の口元ゆるむ
干柿よ早く乾けと朝夕にたしかめる父の手そつと触れにき
白桃のごとき乳房の固く張り搾乳を待つ牛は鳴きつづ

縄文の石器を使ふ人のごとひえの穂一穂ひとほ切りゆく

十 六 日 浦 木 妙 子*鳥 取

夫と吾の二人カラオケとりあえず拍手しながら次の曲選る
今だけは恋も不倫も許されてカラオケルームのエコーに溺れる

カラオケのエコー波打つ小部屋にて三半規管の耳石が揺れる
改札に単身赴任の夫を待つ揺れつつ進む長き秒針
そこここに(十六日)とメモを貼り父は待ちおり子ら集う日を

鐘 の 音 尾 花 照 子*福岡

夕風に銀杏はちりて赤屋根の喫茶店をいま鴉はたちぬ
鐘の音は鐘より剥がれ ゆく水は光を離れクイーン葬
あかがねの水溜まり踏めば秋蝶の湧きて騒擾なりやまぬなり
ゆつくりと酸素のうすくなる街をひとひ歩きぬ鱗なきまま
すこしずつ月を手ばなし唇は風の門たる一生を終ゆ

ジャンプ 牧 野 雅 子*佐賀

半年をジムに通いて体調の良さに気づきぬさらに励まん
ダンスにてすばやい足換えできたとき若さを少し取り戻したり
曲にのり楽しく跳んで汗をかく八十過ぎててもかっこよく踊る
足もつれケガの心配あるジャンプ歳相応に少し控え目
ジム終えて大浴場で汗流す程よい疲れを癒す一時

だ よ だ よ 西 山 伊智子 鹿見鳥

宝物のごと持ち歩く幼子の手に玉虫の緑輝く
近隣の雨戸を締める音聞こゆ台風迫る特別警報
「だよだよ」と何気なく使ふ鹿見鳥弁この地に住みて三十年経つ
「花徳小」中村伊智子「父の書きし竹の物差し今も使ひをり
半月振り訪ひ来る孫はひとしきり辺り見回してのちに抱きつく